



田中耕司教授が センター新所長に就任



1月21日に開催された東南アジア研究センター協議員会において、任期満了の立本成文所長の後任として田中耕司教授がセンター所長に選出された。任期は2002年4月1日から2年間。

田中耕司所長は、1947年3月12日生れ。1969年京都大学農学部卒業。73年同大学院農学研究科

博士課程中退。同年4月京都大学農学部助手。79年8月京都大学東南アジア研究センター助手。84年4月同助教授。98年5月同教授。熱帯農学、熱帯環境利用論専攻。

主な著書に、『日本農書全集7 農業余話・農稼業事』（現代語訳・校注・解題）農山漁村文化協会、1979年、『稲のアジア史3 アジアの中の日本稲作文化』（共編著）小学館、1987年、『講座 文明と環境10 海と文明』（共編著）朝倉書店、1995年、『講座 人間と環境3 自然と結ぶ——「農」にみる多様性』（編著）昭和堂、2000年。

所長就任にあたって

たいへんな時期に所長に選ばれてしまったというのが本音です。ご存知のとおり、2004年の大学法人化を前に、部局長は、学内外のさまざまな動きに対応して部局の計画を策定していかねばなりません。忙しい時期に所長に指名されてしまったものです。もう一つ、センターが本格的な世代交代の時期に入ったときに所長を務めなければならないというのも重荷です。いま、センターは、第一世代（1965年の官制化以降、初期のセンターの活動を担った世代）と第二世代（第一世代とともに共同研究を行った世代）が研究活動を推進した時代から、第二世代と第三世代（第一世代と共同研究を行っていない世代）が地域研究を継承・発展させていく時代へ移りつつあります。たいへんな時期というのは、この二つのことをさしています。

センターは、当初、1部門で出発した研究組織を拡充しつつ、東南アジアの総合的地域研究を目指す全国でも屈指の地域研究機関として発展してきました。そして、昨年度からは、関連する諸分野を統合した「人間生態相関」「社

会文化相関」「政治経済相関」と、研究管理を担当しつつ研究分野や対象地域を横断的に俯瞰する「地域相関動態」からなる4つの研究部門に研究組織を大幅に改組しました。立本前所長の時代に作られたこの新しい皮袋にどんな新しい酒を盛ることができるのか、この新しい酒造りが新所長に与えられた役割であると考えています。

そのためには、所員一人ひとりのそれぞれの分野における研鑽はもちろんですが、統合的・俯瞰的な地域研究を一層深化させるためのさまざまな工夫を仕掛けていく必要があります。センター内外の研究者による共同研究をより実質的な共同研究に仕向けていくことも、そのような仕掛けの一つでしょう。そして、「車の両輪」と表現していたセンターのパートナー、アジア・アフリカ地域研究研究科とどんな共同作業ができるのか、あるいは客員部門の内外の研究者との共同研究をどう具体化していくのか。さまざまな「共同」がこれからのセンターの大きな課題であると考えています。世代交代期の所長として、そのための仕掛け人となるよう心がけていきたいと思えます。

大学法人化を前に、しばらくは激動の時代が続くことになるでしょう。その波のなかで、センターの東南アジア研究が地域研究の最先端を切りひらいていくという覚悟をもって、所員には一層の研鑽をお願いしたいと思います。そして、所外の皆さまには、世代交代の時期に入ったセンターの活動を見守っていただき、これまで以上のご理解とご支援をいただきますようこの場をかりてお願い申し上げます。

その他の主な内容

吉原・立本両教授と山本庶務掛主任退職	…… (2~3)
人事	…… (4)
研究協定相次ぐ・「英文地域研究叢書」新装刊行	… (5)
COE だより・	
<i>Kyoto Review of Southeast Asia</i> 紹介	…… (6)
国際セミナー開催	…… (7)
東風南信・センター人の動き	…… (8)
出版ニュース	…… (9)
Colloquium	…… (10~11)
外国人研究者人事	…… (12)
Visitors' Views	…… (13~18)
研究会報告	…… (19)
連絡事務所だより	…… (20)

吉原・立本両教授と山本庶務掛主任が退職

今春、センター草創期に着任され30年余りの永きにわたりセンターの歴史とともに歩まれ、真にセンターの顔であった方々が退職された。今年3月に定年を迎えられた吉原久仁夫教授、定年を待たずに中部大学国際関係学部に移られた立本成文教授、そして定年退職された山本重夫庶務掛主任の三人である。

吉原久仁夫先生は、1969年7月東南アジア研究センター助手に採用され、71年6月同助教授、87年4月同教授に昇任された。吉原先生の大きな功績は、東南アジア経済研究に制度と文化を組み込んだことにあると言えよう。経済発展を促進する制度は意識的に作られねばならず、それらは政治問題であると同時に文化、ないし道徳の問題であるとして多角的な接近を行い、地域研究としての東南アジア経済研究の方法論を確立された。その研究の第一の領域は、東南アジアにおけるアメリカや日本などの外国直接投資について、国内資本との対比において企業経営の観点からなされた比較研究である。第二の領域は、東南アジアやNIES諸国の経済を、企業経営、技術、政府の役割などの観点から幅広くとらえた研究で、それは *The Rise of Ersatz Capitalism in Southeast Asia* (Singapore: Oxford University Press, 1988) に結実した。楽観的な見方が多かった東南アジア経済を「エセ」資本主義と呼んで分析したこの本は、アジア通貨危機後、再度注目を集め、その先見性が広く再認識されている。第三の領域は、制度の経済学を意識しながら東南アジア諸国の経済を日本や韓国と比較して研究し、制度の経済学の発展や地域研究の方法論に貢献した諸研究である。先生の多数の著作は世界の学会で高く評価されるとともに、中国語や東南アジア諸語に翻訳されて、東南アジア各国の研究に大きな影響を及ぼした。吉原先生は、退職後本年4月からは、北九州市立大学国際環境工学部で研究と教育に励まれている。

立本成文先生は、1969年6月に東南アジア研究センター助手に採用され、75年4月同助教授、80年5月同教授に昇任された。またその間、1998年度から2001年度まで2期4年間、センター所長を務められた。

立本先生の業績は、東南アジアの特定地域でのフィールドワークに基づいた社会・文化の民族誌的研究、および東南アジアに立脚しつつ、広く地域研究の方法と視座を基礎づけ、統合科学としての地域研究の素地を理論的に築かれ



市村真一元センター所長の音頭で乾杯
3月20日京大会館で開催された歓送会にて

たことの二点に大別されよう。

すなわち、マレーシアの先住民社会（オラン・フル）、マレー農民社会等でフィールドワークを実施され、マレー人社会の基本的組織原理、マレー世界の成り立ちとその文化変容過程、一般論としては生活世界とシステムとの関連を明らかにされた。その社会文化生態力学的な研究は、毎日新聞アジア・太平洋奨励賞を受賞した『東南アジアの組織原理』（1989年）に見事に結実した。また1990年には、地域研究における優れた業績に対して大同生命地域研究奨励賞を授与されている。

90年代以降は、東南アジア研究における新しい鍵概念を提示しつつ、メタディシプリンとしての地域研究に固有な手法を提出された。『地域研究の問題と方法』（1996年）はその成果である。2001年発表の『共生のシステムを求めて』でも、センター創設以来の伝統である学際、隣接分野との統合的なアプローチや文系、理系の融合的な視点を深化させ、地域研究の課題と方法を、統合科学、設計科学、臨地科学へと結実させた。

京大にあっては研究センターを諸学問分野の相互交流ハブ、統合の場として位置付けるとともに、大学外にあって果たす役割を、国内外で常に東南アジア地域研究の中心となる知的存在感を備える研究機関として基礎づけた功績には、多大なものがある。

山本重夫事務官は、1970年7月に東南アジア研究センターに採用され、当センター一筋に31年余の永きにわたり勤務され、このたび定年により退職された。

この間、一貫して庶務掛に勤務され、山本さんに聞いて分からないことはないのではと皆が思うほどで、センターとアジア・アフリカ地域研究研究科の研究活動等を支えられ、また同僚に慕われて来られた。白波瀬庶務掛長は、約20年前に初めて山本さんに会ったときの印象を、「何と腰の低い丁寧な方だろうと思った」と語っている。

山本さんは、定年まで働かせていただいてありがたいと常々言っておられた。一口に30年と言っても、同じ所に働いていると色々なことがあったことは想像に難くないが、持ち前の努力、誠実さで乗り越えて来られたことであろう。退職後は、故郷の滋賀県朽木村で奥様と一緒に悠々自適の生活を送られると聞いている。



歓送会でセンター職員・旧職員とともに

立本 成文

センターが官制化されたのは1965年で、センターの誕生にはいろいろな問題が山積し、その苦労は大変であったと伺っている。私はその4年後、1969年の6月に助手として採用された。私の入った頃には、センターが大きく羽ばたく準備が整ったところで、その後も私はあらゆる意味で恵まれた環境で研究生を送れたことを心から感謝している。運鈍根と言われるが、好運に恵まれたことは確かである。それを十分に生かしきれなかった反省をこめて、これからの人生を鈍根で送りたいと思っている。

センターは研究を主とする機関であるので、教育は従とされていた。それを好いことに、知の継承である教育を等閑にしてきた反省もある。勉強に一生懸命で、教える心のゆとりがなかったのかもしれない。これから自分自身の探求を止めるわけではないが、若い人の可能性を引き出し、伸ばしてあげる喜びを味わえればと願っている。

センターもこれから大学改革とともに歩まねばならないので、当然変わらざるを得ないであろう。ただその変化が受身の変化に終始してしまうのはよくない。内在的な変化への必要性が外圧を跳ね返して、あるいは外圧を利用して、よりよい方向に向かうことがやはり理想であろう。運というのは、たとえ逆風であってもそれを逆手にとって前に進むということであると私は思っている。この大学改革の時代はセンターがその研究方向を見直し、改めて、時代に一步先んじた研究体制をとる絶好のチャンスである。それをみすみす見逃す手はない。一方、組織と個人の関係は研究の場合ことに相克することがある。しかし、これも組織の要請を個人の内発的なこだわりに取り込んでしまうことが好運を呼ぶ道であろう。センターという組織を個々人の研究に利用できる体制を整えるチャンスである。チャンスを生かすためには、チャンスへのコミットメントがまず必要である。



3人のこれまでのご功績、ご苦労に感謝し、また今後ますますのご活躍を祈念して、3月20日京大会館で送別会が開かれた。立本教授が「センターの30年を振りかえって」と題して、自身の研究とセンターの歴史を重ねて30年を回顧し、また地域研究の今後の課題にも言及された後、吉原教授が「経済学と地域研究のはざまにて」と題して最終講義をされた。ひきつづき開催された懇親会には、旧職員や関係者など学内外から130人を超える参加者があり、和やかな雰囲気の中に歓談が繰り広げられた。宴たけなわ

吉原久仁夫

なにをやってきたのか、また経済学から出発した者が地域研究センターに来てどういう問題に悩んだかは、「京大大学学生新聞」(2月5日)の退官インタビューと3月20日の退官講演で述べたので、ここではそれを繰り返さないことにする。ここではもう一つ私が苦労したことを述べておきたい。

私はセンターに来た時から、自分の研究を世界に発信したいと思っており、そういう努力をしてきた。良い論文・本を書くためには、内容とそれを伝える技術が大切だが、ここでは伝える技術について書いておきたい。

日本人研究者にとって世界に自分の考えを発信する上で障害になるのは言葉である。国際的学術コミュニケーションは英語で行われているので、英語で書く技術を習得することが必要になる。自然科学の場合は、数字や数式が重要な役割を果たしているのに、英語で書く技術は特に重要ではないかもしれないが、私の研究分野(社会科学)ではそうではない。相手に伝える技術がかなり重要な役割を果たす。

現在でも私の文章力は不完全なものである。しかし、書いた内容を理解してもらえるようになっており、変なところは出版社なり編集者が直してくれる。この段階を10とすれば、センターに来た1960年代末は5くらいの段階であったのではなからうか。語彙を増やす、専門語を覚える、文章での論理の展開の仕方を勉強する、分かりにくい文章とわかりやすい文章を判別する、このような努力をかなり意識してやり、またそのために時間をかけた。

いくら良い考えでも、それを伝える技術がまずければ読んでくれない。最近、ワープロの出現と研究者の増加で、学術論文は洪水のように出てきていて、書いたものをなかなか読んでももらえない。このような状況下で自分の書いたものを読んでももらうためには、もちろん内容も重要であるが、それを伝える技術も重要なのではなからうか。センターが世界のCOE (Center of Excellence) になるためには、世界に発信する研究者が多くなる必要があるが、そのためには伝える技術の問題に心配りをしなければならないのではなからうか。現在、この問題についての認識が不十分のように思われる。



の時、山本さんが在職中のエピソードなど交えながら30年を振りかえられ、初めて披露される話に皆興味深く耳を傾けていた。

人 事

教官人事

<新任>



宋 現鋒 (ソン シャンフェン) 助手 (2002年4月1日付)。

1969年11月1日生。92年7月中国鉱業大学煤田地質学部卒業。95年6月同大学院修士課程修了。同年9月中国科学院地理研究所博士後期課程入学、98年7月同課程修了、理学博士号取得。同年9月中国科技促進経済投資公司において研究に従事。

2000年4月日本学術振興会外国人特別研究員として、京都大学東南アジア研究センターにおいて研究に従事。

〔主要論文〕

Digital Image Processing: A Practical Quantitative Method for Induced Fractures Analysis. *Scienta Geologica Sinica* 4(3), 1995. (共著) ▽Web Geographic Information System. *Scienta Geologica Sinica* 6(4), 1997. (共著) ▽Towards Chaining Geo-Computational Web Applications across Multiple Sites. In *Proceedings of the 20th International Cartographic Conference* Vol.4, 2001. (共著)

<昇任・退職等>

□吉村充則助手は2001年12月1日付け総合地球環境学研究所助教授に昇任。

□吉原久仁夫教授は2002年3月31日付け定年退職。4月1日付け北九州市立大学国際環境工学部教授。

□立本成文教授は2002年3月31日付け退職。4月1日付け中部大学国際関係学部教授。

<国内客員部門>



青山 亨教授 (2002年4月1日付)。
1957年12月5日生。81年3月京都大学文学部哲学科仏教学専攻卒業。92年3月同大学院文学研究科博士課程単位取得退学。94年8月シドニー大学 Ph.D. 取得、11月鹿児島大学南太平洋海域研究センター助教授。2000年4月鹿児島大学多島圏研究センター教授。

〔主要論文〕

Prince and Priest: Mpu Tantular's Two Works in the Fourteenth Century Majapahit. Memoirs of the Research Department of the Toyo Bunko (The Oriental Library) No.56, 1999. ▽「東ジャワの統一王権」『岩波講座東南アジア史2 東南アジア古代国家の成立と展開』石澤良昭 (編), 岩波書店, 2001. ▽「シンガサリ=マジャパヒト王国」『岩波講座東南アジア史2 東南アジア古代国家の成立と展開』石澤良昭 (編), 岩波書店, 2001.

□阿部健一 (国立民族学博物館地域研究企画交流センター) 助教授は再任。任期は2003年3月31日まで。

事務官人事 (4月1日付)

□山本照雄事務長はウィルス研究所事務長に配置換。後任に福本穂医学部附属病院総務課課長補佐。

□山本重夫庶務掛主任は3月31日をもって定年退職。後任に南雲円大型計算機センター等庶務掛主任。

□竹口仁美会計掛主任は教育学部会計掛主任に配置換。後任に岡崎道子総合人間学部・人間・環境学研究科第一経理掛主任。

回想つれづれに

山本 重夫

31年9カ月の歳月が流れ去りました。東南アジア研究センターでお世話になり、ご指導とご理解のもとにたどり着いた道程です。

私は京都に生まれましたが、第二次世界大戦時の疎開により、20年間を秘境・朽木の地で過ごしました。日本万国博覧会「人類の進歩と調和」が開幕された1970年、時は高度経済成長絶頂前夜、若者の都会流出の波間を漂うかの

如く、わが愛する京都に未来への希望を委ねたいとの思いに駆られ、単身京都に出てきました。

その後全く予期せぬ巡り合わせで、センターに奉職することができ、何物にも替えがたいわが世の春の訪れと驚喜いたしました。私の最初の仕事は、会議の開催通知を協議員の先生方に直接お届けすることでした。当時の上司・森

本初事務官に付き添われて、北は北白川の人文研 (旧館) にはじまり、各構内 (北部・本部・南部) に加え、南は皮膚特別研究施設 (病院構内西南角)、さらに宇治地区の研究施設まで一日かけて回りました。次から迅速にと言われたことをよく覚えています。

日々の業務は、事務連絡・庁舎管理が主でした。当時は教官・事務官で夜間管理 (宿直) が行われていましたが、少人数の上に教官のフィールドワークにウェイトを置く研究施設の特長から事務官の負担が重かったため、私が月の半分その用務に就くことになったのです。その後、1975年12月に宿直は廃止され、現在は6時の見廻り当番を事務官が交代で行い、以後は警備保障会社に委ねています。

1998年に大学院アジア・アフリカ地域研究研究科が設立されると、事務室は東南アジア研究センター等事務室と名称が変わり、センターと大学院の両方の事務を兼ねることになりました。来年度には初の地域研究学博士が誕生とのこと、自分のことのように嬉しく思います。

日毎今日もしっかりがんばれヨ!と400余 (教職員・院生) の瞳による声援のもと、去る日を無事迎えることができました。永かったようで、日々斬新さに巡り会えた、アツという間の感動の時の流れでした。心から厚くお礼を申し上げます。

研究協定締結相次ぐ

東南アジア研究センターは、2002年1月4日、インドネシア科学院（LIPI）との間で、3年間の学術上の交流と協力に関する覚書の調印式をジャカルタの同院で行い、センターから立本成文所長、インドネシア科学院からはタウフィック・アブデュラー議長が協定書に調印した。インドネシア科学院は、社会人文科学部門、自然科学部門、工学部門などの19の研究所より成り、997人（技官等は除く）の研究者を擁している。今回の研究協定は、東南アジア研究センターで行ってきた自然・社会・人文科学を統合した学際的地域研究にならば、インドネシア科学院も各部門を統合した学際研究を発展させたいとする意向があつて、締結の運びとなつた。

また、センターは、2001年7月23日、大学院アジア・アフリカ地域研究研究科（AA 研究科）とともに、インドネシアのボゴール農業大学およびインドネシア国立国土地理調査機構との間で「インドネシア沿岸地域における農業生産及び地域開発のための研究に関する覚書」を締結した。さらに、2002年2月7日、センターはタイのプリンス・オブ・ソクラー大学理学部との間で国際学術協定書を締結した。そして、3月11日、センターはAA 研究科とともにミヤ



協定書を取りかわすタウフィック・アブデュラー
インドネシア科学院議長と立本成文東南アジア研究センター所長
(2002年1月4日、インドネシア科学院にて)

ンマーのイエジン農科大学との間で国際学術交流協定を締結し、さらに3月25日にはミャンマーの東南アジア教育省組織歴史伝統地域センターとの間で、学術上の交流に関する覚書を締結した。

転任のあいさつ

吉村 充則



今、新しく移った研究所のデスクに向かい、文章を書き始める前に目を閉じてセンター在職の約6年間の思い出している。いろいろな出来事が私の脳裏をかすめていく。

当時、私は典型的なサラリーマン技術屋だった。だったと言うのは、センターにいる間に多くの方々と出会い、本当に多くの経験を積み少しは研究者っぽくなって来たのではないかと思うからだ。一方、私の専門であるリモートセンシングと地理情報システムがセンターの地域研究にどれだけ貢献できたかを考えると、ここは私の怠慢もあるのだが、まだまだ役に立てるとは言えないのが現状だ。そこは、この場を借りてお詫びしなければならない。

では、なぜか。事象の時間軸・空間軸（時空間スケール）における、とらえかたの違いが一番大きいのではないかと考える。人は、ものをとらえる時、無意識に時間や空間といったものを意識しているはずである。しかし、考えるべき時間的長さや、考慮すべき空間的広がり、人それぞれで異なる。特に、分野の異なる研究者が集まって議論する場合、時空間スケールにおける個々の認識レベルのギャップが思った以上に大きいのが現状である。

センターで考え至ったこんな考えに基づいて、このところ私は空間における視点の違い（フィールドとグローバル）に主眼を置いていろいろなことを試行錯誤してきた。少なくとも特定の事象を異なる空間スケールでとらえ、フィールドからグローバルへのスケールアップを図る方法については、おぼろげながらその方向が見えてきた気がする。

最後にセンターのますますのご発展を祈願し、筆を置くことにする。短い間でしたが、ありがとうございました。

英文地域研究叢書 新装なって刊行

このほど英文地域研究叢書の第2冊と第3冊が相次いで上梓された。Tsubouchi Yoshihiro（坪内良博）著 *One Malay Village: A Thirty-Year Community Study* と Kasian Tejapira 著 *Commodifying Marxism: The Formation of Modern Thai Radical Culture, 1927-1958* である。1999年に Yoshihara Kunio（吉原久仁夫）著 *The Nation and Economic Growth: Korea and Thailand* が同叢書の第1冊として出版されているが、今回から京都大学学術出版会とオーストラリアの Trans Pacific Press の共同出版となり、叢書名も Kyoto Area Studies on Asia と改称して性格をより明確にした。また表紙を臙脂の地色に深緑色の写真を配したデザインに一新した。

One Malay Village は同じ著者の『マレー農村の20年』（地域研究叢書1）の翻訳に最近の調査結果を加えて、東南アジア農村が日本の農村以上に激変を経験した時期に関して多くの新事実を提示し、さらに社会変動の理論化に対しても重要な示唆を含む好著である。また、Kasian 氏（タマサート大学政治学部助教授）の著書は、「商品としてのマルクス主義」というタイトルの下に、タイにおけるマルクス主義の受容を文化と政治の観点から分析した意欲作である。東南アジア研究センターは2000年4月より、センター外からも叢書の投稿を受け付け、良質の原稿の発掘・出版を目指してきたが、Kasian 氏のこの著作はその嚆矢となった。



両著とも日本と海外で好評発売中である。なお、2002年度中にさらに3冊がこのシリーズから出版の予定である。

COEだより

いよいよ今年度で5カ年にわたる COE プロジェクトが終わります。東南アジア研究センターとアジア・アフリカ地域研究研究科の2部局がこの5年間にどのような中核的研究拠点を形成できたのかが問われる年を迎えました。事務局をあくまで一人としては、何とかうまく行ったのではないかと感じる一方、期待された成果にまではまだまだ到達できていないという反省もなきにしもあらずです。これからの1年が正念場となりそうです。

最終年度でもあり、プロジェクトを総括するためのさまざまな企画が現在進んでいます。今回は、このような企画について紹介します。

その第一は国際シンポジウムです。10月25日から27日にかけて京都駅前の大学コンソーシアム・キャンパス・プラザ京都で、"Regions in Globalization" のテーマで開催します。言うまでもなく、グローバル化の波が全世界を覆っています。しかし、その一方で、地域ではそれに対するさまざまなアクションが起こっています。このことを、COE プロジェクトが掲げてきた3つの研究レベル、「生態環境と物質生活」「交換経済と生活文化」「国家と資本主義」に対応する以下の3つのパネルで取りあげようという試みです。第1パネル "Rethinking Agricultural Development: Globalization and Site-Oriented Approaches" では、途上国での農業開発を地域研究としてどう再考するかが問われます。第2パネル "Transformation of Everyday Practice in the Age of Globalism" では、宗教実践やジェンダーなどの側面から、グローバル化も

たらず社会文化変容の実態と影響が議論されます。第3パネルは、国民国家という枠組みや地域安全保障に対するグローバル化の政治的インパクトを議論する "Regions and States under Stress" です。そして、第4パネル "Regions and Globalization" が総括討論となります。これらのパネルの他に、26日の午前には、エマニュエル・ウォーラシュタイン教授による特別講演 "Regions in Globalization in the 21st Century" が行われます。この特別講演は一般公開を予定していますので、是非、お出かけください。

国際シンポジウムでの締めくくりに、研究成果を出版物のかたちで公開するための企画も進んでいます。東南アジア、南・西アジア、そしてアフリカの各研究クラスターによる論文集に加えて、昨年度から実施している地域間比較研究の成果も論文集として出版の予定です。来年度から逐次刊行という企画ですので、事務局は、今年度後半から原稿提出の督促係を務めることにもなります。

プロジェクトで収集した大量の図書（昨年度末ですでに約69,000冊）の公開も大きな課題です。すでに約53,000冊が検索可能となっていますので、その検索システムはプロジェクト期間中に完成しますが、収書内訳の整理や公開がこの1年間の大きな仕事になりそうです。地図や衛星画像の公開・利用システムの開発とあわせて、中核的研究拠点の形成にふさわしい事業として評価されるために、研究インフラにかかわるこれらの作業も正念場を迎えることになります。（文責：田中耕司）

Introducing the *Kyoto Review of Southeast Asia*

March 2002 marked the debut of the Center's latest publication, an internet review journal of Southeast Asian books and affairs funded by the COE. The *Kyoto Review of Southeast Asia* provides a venue to learn about important publications and debates in Southeast Asia, deepen international intellectual exchange, and enhance the visibility of national language-based writing.

Increasingly, Southeast Asian scholars write in their national languages, both as scholars and as public intellectuals. By presenting reviews and reprints in English and selected abstracts in several national languages, the *Kyoto Review* aims to create conversations between intellectual communities whose access to growing bodies of national scholarship would otherwise be limited. There are also many non-academic intellectuals—journalists, NGO workers, policy analysts, artists—whose important work we hope to bring into more sustained

engagement with academia. To facilitate these conversations, the site includes feedback functionality on all pages.

Each twice-yearly issue of the *Kyoto Review* is organized around a theme. At the core are review essays of a synthetic, critical nature. These might take the form of a "state of the discipline" survey, review of two or more books, or critique of a paradigm. Each review essay is currently abstracted in Indonesian/Malay, Filipino, Japanese, and Thai. Shorter reviews focus on books published in national languages, and the Features section includes commentaries, profiles, and interviews. Finally, each issue reprints a selection of writing originally published in Southeast Asia.

The *Kyoto Review of Southeast Asia* can be reached from the Center's homepage or directly at <http://kyotoreview.cseas.kyoto-u.ac.jp/>

(Reported by Donna Amoroso)

国際セミナー開催

COE 国際セミナー

COE 東南アジア研究クラスターの生態環境サブクラスターは2001年11月15-17日の3日間、国際セミナー "Changing People-Environment Interactions in Contemporary Asia: An Area Study Approach" を京大大会館で開催した。その狙いは東南アジアと周辺地域で急速に進行している環境変化の実態を鳥瞰することである。東南アジア研究センターとアジア・アフリカ地域研究研究科の生態関係研究者が自ら行ってきた地域研究の成果と、作り上げて来たネットワークによる研究成果を総合的に提示し、共通の理解を進める点で大きな成果があった。

セミナーは一会場で行われ、3セッション、8サブセッションで31編の研究成果が報告された。31編の内、16編は外国人研究者による発表で、その内訳はベトナムが5人、インドネシアが4人、マレーシアが2人、インドが2人、ラオス1人などである。

第一セッション "Confrontation and Environment" はふたつのトピックを取り上げて論じた。ひとつはインドネシアの移住政策に伴う泥炭湿地林の破壊的開発と背後にある移住政策の歴史的展開、及び問題点である。

第二セッション "Dynamism of Health and Ecology" は、医学および保健学サイドから human ecology に関連するトピックを取り上げた。ヒトの老化および関連する疾患、アジアから世界に広がる感染症およびアジアに局在する感染症、アジアの環境中に分布する有害物質、および解析方法論に関する研究報告があった。

第三セッション "People's Strategies in Eco-resource Management" は、環境保全と両立し得る発展のあり方を求めて、生態資源管理の現状と新たな方式の模索が報告された。また、Eco-technology の考えが東南アジア、インドの伝統に即して展開された。

(文責：古川久雄 (AA 研究科))

International Workshop on Development of Slopeland Agriculture in Mainland Southeast Asia

2002年3月14~17日、チェンマイにおいて、東南アジア大陸山地部の農業や環境保全、資源管理をトピックとする国際ワークショップを開催した。このワークショップは、International Center for Research in Agroforestry (ICRAF)、Resources Policy Support Initiative (REPSI) of World Resources Institute (WRI)、JSPS バンコク連絡事務所と共同で開催したもので、ベトナム、ラオス、タイ、アメリカ、日本から約50人の研究者や大

学院生が出席した。Nutrition Cycling and Environmental Degradation、People's Livelihood and Poverty Alleviation、Spread of Cash Economy and Commercialization of Agriculture と題する3つのセッションで、合計18のペーパーが発表され、焼畑農業の潜在生産力と持続性、傾斜地利用の在来技術、天然資源利用、コミュニティと政府の役割、流域管理などに関して活発な議論が交わされた。このワークショップに関するお問い合わせは kono@cseas.kyoto-u.ac.jp まで、またワークショップで発表されたスライドは近日中にホームページで公開される予定である。

(文責：河野泰之)

Core University Program Workshop on Networks in Comparative Historical Perspectives and on U.S. Hegemony and the Questions of Technocracy

The Center for Southeast Asian Studies recently organized and conducted the Core University Program Workshop on Networks in Comparative Historical Perspectives and on U.S. Hegemony and the Questions of Technocracy. This two-day workshop, which capped the three-year Core University projects headed by Prof. Takashi Shiraishi and Prof. Takeshi Hamashita and dealing respectively with hegemony and technocracy, and networks, was held on March 25 and 26, 2002 at the Shiran Kaikan. A number of discussants for the six panels were drawn from the team of scholars who are part of Prof. Shigeyuki Abe's ongoing Core University research project on the State, Market, Society and Economic Integration.

Seventeen scholars from Japan, Thailand, and other Southeast Asian countries—including members of the CSEAS and ASAFAS faculty, namely, Takashi Shiraishi, Takeshi Hamashita, Yoshifumi Tamada, Koichi Fujita, and Caroline S. Hau—shared and discussed the results of their research. The list of visiting scholars who participated in the workshop attests to the diversity of the disciplinary

backgrounds and research interests that greatly enriched the presentation and discussion of papers: Naris Chaiyasoot, Surichai Wungaeo, Bhanupong Nidhiprabha, Charnvit Kasetsiri, Supang Chantavanich, Thanet Aphornsuvan, Trisilpa Boonkhachorn, Dhiravat Na Pombejra, Suthiphand Chirathivat, Ukrist Pathmanand, Kasian Tejapira, Olarn Chaipravat, Yupha Klangsuwan, Pasuk Phongpaichit, Chalong Soontravanich, and Pongsak Hoontrakul from Thailand; Khoo Boo Teik from Malaysia; Vedi Hadiz from Indonesia; Teresa Encarnacion Tadem from the Philippines; and Yonosuke Hara, Akira Suehiro, Saya Shiraishi, Yumiko Okamoto, Takashi Torii, and Fumio Nagai from Japan.

The six panels covered a broad range of topics such as the social and academic construction and critique of the concepts of networks and hegemony; Southeast Asian responses to the Asian Crisis; American influence and intervention in the region; the formation and embedment of technocracy in Southeast Asia; and patterns of governance and protest in Indonesia, the Philippines, and Thailand. The planning session that followed the panels focused on the prospects of organizing future collaborative research projects and on the logistics of revising the workshop papers into articles for future publication.

(Reported by Caroline Hau)

東風南信 REFLECTIONS

北タイの景色



荻野 和彦

サヴィアン君は北タイのナーン県出身である。チェンマイ大学のストン博士に森林土壌を学んだ。山の仕事に慣れていて、すこぶる強かった。推薦によって愛媛大学に留学し、北タイ季節林の土壌と植物の無機分析を精力的におこない、博士(学術)の学位を得た。1998年秋、帰国した時、ちょうど開校したナレスウォン大学に職を得た。大変ラッキーな男だとうらやましがられた。

かれはチュラロンコン大学やカセートサート大学出身者のような秀才タイプではない。黙々とひたすら分析を続けて、データの量が勝負する。どこかひと味違うかれの人となり気がなっていた。いちどかれの村を訪ねてみたいとずっと思っていた。

昨2001年、念願がかなった。ナーンの県都から西へ約30キロ、バーナムコン村がそこだった。街道沿いの家に両親、妹夫婦、独身の弟が住んでいる。大きな家屋敷だ。白川村の合掌造りの家を思い出させた。裏庭には米倉があった。収穫したばかりの籾がどっさり蓄えられていた。家族全員が一年間食べてなお余る。豊穡と悠久を感じさせた。時間がゆっくりと流れていた。

かれは自分のことをコン・ムアンだという。タイ人である。隣には上流側にモン、俗に言うミャオ族の、下流側にミェン、俗にヤオ族の村がある。タイ人が水田を、モンとミェンは焼畑を営む。モンはかれら自身の交易路、ネットワークをもち、ミェンは村で刺繍、銀細工をつくっている。翌朝早く、ひとが尋ねてきた。お母さんが対応している。聞けばミェンだという。モンにはモン語、自分たちのあいだでは北タイ語そして外来者にはバンコク語で話すという。ここは山岳民族とタイ人が混住して、うまくやっている地方なのだ。

30年前、この地方にたいへんな騒ぎがもちあがった。「中国に支援されたという共産ゲリラ」の掃討作戦が実施されたのだ。ゲリラの隠れ家をなくすため、森林を徹底的に切り開くモン型の畑作を政府が懲懲した。畑地を作るために伐った木を焼くから、焼畑のひとつではあるが跡地は荒廃地と化す。10年以上にわたって続いたこの作戦によって、次々と森林が伐開されていった。人手が足りなくなるとラオス国境から人が呼ばれた。広大な面積の森林が消え、荒廃地が残った。

事態がようやく落ち着いたとき、森林局が森林再生に乗り出した。流域管理、造林試験など数々のプロジェクトが導入されたけれど、森林は回復しない。荒廃地に植林するという技術的な困難だけでなく、林地を畑地に換えてしまったという土地政策の過ちのツケが回ってきた。はるかかなたまで、裸の山、山肌を剥きだしにした、荒涼とした景色がつづく。隣人を愛するやさしい人々が地球に残した爪痕に思わず息を呑む。

(1965.7~1966.4東南アジア研究センター助手。愛媛大学教授を経て現在滋賀県立大学環境科学部教授)

センター人の動き

C. Hau (9月23日~10月9日) フィリピン「東南アジア華僑文学とナショナリズムに関する資料収集」▽河野泰之(10月6日~11月12日) タイ「環境資源の総合評価と管理に関する調査・バンコク連絡事務所管理運営」▽濱下武志(10月6~11日) アメリカ合衆国「アジア地域研究ワークショップ参加」▽白石隆(10月12日~11月1日) インドネシア「ウォーラセア地域の日常生活と監視メカニズムデータ収集」▽柳澤雅之(10月15~27日) ミャンマー「経済構造政策支援に関する調査」▽濱下武志(10月18日~11月14日) シンガポール他「ネットワークの比較史に関する調査」▽立本成文(10月26日~11月12日) インドネシア他「東南アジアの海域社会とネットワークの動態研究」▽水野広祐(11月3日~2002年1月31日) インドネシア「過渡期の西ジャワにおけるコミュニティ組織とネットワークに関する調査」▽P. Abinales(11月9日~12月8日) タイ他「知的ヘゲモニーの構造テクノクラシーに関するデータ収集」▽西淵光昭(11月10~12日) 中華人民共和国他「食品衛生検査技術に関する調査」▽河野泰之(11月19日~2002年4月6日) タイ「環境資源調査の総合的評価と管理に関する調査・バンコク事務所管理運営」▽濱渦明夫、森隆(11月21~30日) インドネシア・タイ「東南アジア諸国の大学運営及び施設の実情調査と連絡事務所管理状況視察」▽後藤美郎(11月22~30日) 同「同」▽濱下武志(11月22~25日) 韓国「日韓歴史家会議出席」▽阿部茂行(11月22~30日) タイ「アジアと日・米・欧の経済・文化・政治リンクの総合的研究に関する資料収集」▽安藤和雄(11月22日~12月24日) ミャンマー他「少数民族における農村開発と持続的農業に関する調査」▽速水洋子(11月

24日~12月15日) ミャンマー「ミャンマー北・東部跨境地域における生物資源利用とその変容に関する調査」▽山田勇・田中耕司(11月24日~12月19日) 同「同」▽白石隆(11月25日~12月1日) タイ「『東南アジア共同体』シンポジウム出席」▽石川登(11月28日~12月28日) マレーシア「サラワク州における労働移動に関する調査」▽A. T. Rambo(11月28日~2002年1月6日) ベトナム他「『ベトナム開発計画プロジェクト』ワークショップ参加」▽松林公蔵(12月3~19日) ミャンマー「ミャンマーにおける健康資料収集」▽白石隆(12月15~17日) 韓国「『東アジアの地域形成』シンポジウム参加」▽P. Abinales(12月18日~2002年1月31日) フィリピン「ウォーラセアプロジェクトのための資料収集等」▽白石隆(12月21~24日) タイ「アジア政治フォーラム出席」▽C. Hau(12月22日~2002年1月14日) フィリピン「東南アジアに関する会議参加等」▽立本成文(2002年1月3~11日) タイ・インドネシア他「連絡事務所視察・国際会議出席」▽田中耕司(1月3~9日) 同「同」▽米澤真理子(同) タイ他「東南アジアの出版に関する資料収集」▽山本重夫(同) 同「連絡事務所庶務事務等打合せ」▽阿部茂行(1月4~17日) タイ他「政府と市場に関する調査」▽林行夫(1月6~14日) ラオス「跨境文化の動態と地域編成に関する調査」▽柳澤雅之(1月7~20日) タイ他「ミャンマー経済構造政策調整支援のための調査」▽北村由美(1月8~16日) フィリピン「フィリピン関係蔵書コレクション調査」▽濱下武志(1月10~18日) インド「インド洋交易史料調査・国際会議参加」▽松林公蔵(1月12~16日) 韓国「韓国高齢者の実態調査」▽白石隆(1月13~20日) インドネシア「インドネシアの地方分権資料収集」▽濱下武志(1月20~22日) 韓国「日韓歴史家会議運営委員会参加」▽阿部茂行(1月29日~2月13日) タイ他「政府と市場に関する調査」▽五十嵐忠孝(1月29日~2月8日) インド

◇『東南アジア研究』39巻3号

Southeast Asian Studies 39(3)

Social Organization and the Management of Natural Resources: A Case Study of Tat Hamlet, a Da Bac Tay Ethnic Minority Settlement in Vietnam's Northwestern Mountains. A. Terry Rambo; Tran Duc Vien▼Some Things Poetry Can Tell Us about the Process of Social Change in Vietnam. Neil L. Jamieson▼Social Capital and Business Networking: A Case Study of Modern Chinese Transnationalism. Hong Liu▼Aspects of the Place and Role of the Chinese in Late Nineteenth Century Bangkok. Porphant Ouyyanont; Tsubouchi Yoshihiro▼The Role of Trees in Countering Land Degradation in Cultivated Fields in Northeast Thailand. Patma Vityakon▼The Expansion of Eucalyptus Farm Forest and Its Socioeconomic Background: Case Study of Two Villages in Khon Kaen Province, Northeast Thailand. Ubukata Fumikazu▽書評 (Book Reviews) Bui Minh Dao. *Trong trot Truyen thong cua cac Dan toc tai cho o Tay Nguyen*. A. Terry Rambo▼Daniel Arghiros. *Democracy, Development and Decentralization in Provincial Thailand*. 玉田芳史▽現地通信「バンコク雑感」阿部茂行

◇『東南アジア研究』39巻4号

Southeast Asian Studies 39(4)

「東南アジアの経済発展メカニズム——なにが分かっているのか」吉原久仁夫▼「立憲革命後のタイにおける道路整備 (1932~1941年) ——最初の道路建設計画の策定」柿崎一郎

State Formation in Comparative Perspective

Preface. Shiraishi Takashi▼Introduction. Patricio N. Abinales▼State Formation in the Shadow of the Raj: Violence, Warfare and Politics in Colonial Burma. Mary P. Callahan▼State Building and Repression in Authoritarian Onset. Vincent G. Boudreau▼Modeling the State: Postcolonial

Constitutions in Asia and Africa. Julian Go▼Armed Rebellion in Collapsed States. William Reno▼American Rule and the Formation of Filipino "Colonial Nationalism." Patricio N. Abinales

▽書評 (Book Reviews) Dang Nghiem Van. *Ethnological and Religious Problems in Vietnam*. A. Terry Rambo▼Michael L. Ross. *Timber Booms and Institutional Breakdown in Southeast Asia*. 葉山アツコ▽現地通信「京都便り」立本成文

◇英文地域研究叢書 (Kyoto Area Studies on Asia) No. 2-3

■Tsubouchi Yoshihiro. 2001. *One Malay Village: A Thirty-Year Community Study*. Kyoto University Press and Trans Pacific Press.

■Kasian Tejapira. 2001. *Commodifying Marxism: The Formation of Modern Thai Radical Culture, 1927-1958*. Kyoto University Press and Trans Pacific Press.

◇研究報告書シリーズ (Research Report Series)

■Lye Tuck-Po, ed. 2001. *Orang Asli of Peninsular Malaysia: A Comprehensive and Annotated Bibliography*.

■Sompong Charoensiri. 2001. *Database Management Systems for Thai Collection in the Center for Southeast Asian Studies (Library) Kyoto University*.

■Leng Ten Moi. 2002. *Online Cataloging of Indonesian and Malaysian Materials: An Input Manual*.

■田中耕司 (編). 2002. 『フロンティア社会の地域間比較研究』

<その他の出版物> Other Publications

Le Trong Cuc and A. Terry Rambo, eds. 2001. *Bright Peaks, Dark Valleys: A Comparative Analysis of Environmental and Social Conditions and Development Trends in Five Communities in Vietnam's Northern Mountain Region*. Hanoi: National Political Publishing House.

出版ニュース
Publication News

▽ネシア「在来暦法の調査研究」▽C. Hau (2月4~17日) タイ・フィリピン『『知的ヘゲモニーの構造変化 (ネットワーク比較史)』に関する資料収集等』▽木谷公哉 (2月5~10日) タイ「コンピュータ設備の増強・ネットワーク環境改善の設備更新」▽西淵光昭 (2月8日~3月6日) タイ「腸管感染症発生状況と環境からの原因菌の分離状況情報収集等」▽田中耕司 (2月8日~3月6日) インドネシア他「ウォーラセア地域における生活世界と境界管理に関する調査」▽白石隆 (2月9~21日) インドネシア「ウォーラセア地域における人の移動とデータ収集」▽松林公蔵 (2月10日~3月17日) インドネシア「イリアンジャヤ州における神経難病調査」▽P. Abinales (2月11~21日) インドネシア「ウォーラセア地域における生活世界と境界管理に関する調査」▽林行夫 (2月11~24日) ラオス他「ラオスにおける跨境文化の多様性と保存に関する調査・国際ワークショップ参加」▽速水洋子 (2月11日~3月2日) タイ他「国際ワークショップ参加・山地民社会の移動調査」▽立本成文 (2月11日~3月6日) インドネシア他「海域世界研究に関する資料収集等」▽柳澤雅之 (2月12~23日) ラオス「国際ワークショップ参加等」▽A. T. Rambo (2月21日~4月8日) ベトナム他「ベトナム開発計画に関する共同研究」▽濱下武志 (2月23~28日) 香港他「華僑ネットワークに関する調査」▽C. Hau (2月22日~3月3日) フィリピン「フィリピン歴史関係図

書及び文献収集」▽山田勇 (2月25日~3月5日) 中華人民共和国「西南中国における生態資源研究ネットワーク構築」▽濱下武志 (3月1~16日) 香港他「アジア地域の社会経済システムの比較研究」▽海田能宏 (3月1~18日) バングラデシュ「バングラデシュ参加型農村開発行政支援プロジェクト共同研究」▽石川登 (3月1~25日) マレーシア「サラワク州北部地域の産業構造の調査」▽木谷公哉 (3月4~9日) インドネシア「コンピュータの環境改善・常時接続化の準備」▽安藤和雄 (3月4~19日) ミャンマー「少数民族における農村開発と持続的農業に関する調査」▽藤田幸一 (3月7~13日) ミャンマー「ミャンマー経済構造調整支援に関する会議参加」▽白石隆 (3月9~15日) インドネシア『『地方分権・民主化』シンポジウム出席』▽柳澤雅之 (3月11~19日) タイ「傾斜地農業の持続性に関する国際ワークショップ参加」▽田中耕司 (3月16~20日) インドネシア「ラオス経済政策支援プロジェクト合同委員会参加」▽山田勇 (3月21~29日) 中華人民共和国「ウォーラセア海域における生活世界と境界管理の動態的調査」▽立本成文 (3月22~26日) ミャンマー「ウォーラセア研究についての共同研究協議」▽林行夫 (3月22~31日) タイ他「仏教徒社会における宗教政策に関する調査、資料収集」▽白石隆 (4月7~10日) インドネシア『『日本・インドネシアの相互協力』会議出席』

Colloquium

©"Villagers' Self-perception of Their Life Situation in Vietnam's Northern Mountain Region" by *A. Terry Rambo*, October 25, 2001.

Findings of recent research on villagers' perceptions of their life situation in five communities in the Northern Mountain Region (NMR) were presented. The research employed the Self-Anchoring Striving Scale (SAS) in which respondents are asked to rate their life situation in the past, present, and future on a ten-point scale (Table 1).

Table 1 Comparison of Mean Past, Present and Future Ladder Ratings for the NMR Communities

	Past	Present	Future
Khe Nong	1.78	1.93	2.55
Thai Phin Tung	2.27	3.24	4.28
Tat	2.40	3.50	5.10
Ngoc Tan	2.83	4.43	6.44
Lang Thao	2.78	5.05	6.77

People in all communities rate the present higher than the past and expect the future to be better than the present. It is no longer fashionable to refer to the developing world as undergoing a "revolution of rising expectations," but just such a revolution has occurred in the NMR. Since the *doi moi* reform began some 15 years ago, living conditions in the villages have greatly improved. Not surprisingly, this has created the expectation of continuing rapid improvement in the future. Development policy-makers should consider the consequences of failing to meet these expectations.

©"Globalization and Malaysia" by *Yoshihara Kunio*, November 22, 2001.

The major problem a developing country faces in pursuing globalization is the linguistic and cultural polarization that arises in the process and threatens social stability and disturbs the economy. Japan has overcome the problem by strengthening and diversifying its language and culture, but Malaysia will find it difficult to do so.

I foresee either of the following two possibilities will happen there. One is that those who feel that they are left behind globalization will be politically mobilized to reject the open market system for a closed, state-controlled economy, which is a sure recipe for economic stagnation. The other is that in order to avoid the possibility, the government will step up economic intervention (or cannot reduce the present level of intervention), so that liberalization

and deregulation, which are needed to sustain economic growth, will not go very far.

The only way to avoid such possibilities is to educate the bulk of Malaysians in the national language and enable them to adjust to economic globalization while keeping them attached to national culture (so that they remain as a national community), but this is difficult in Malaysia because of the weakness of its national language and culture.

For details, see the book I published (*Globalization and National Identity: The Japanese Alternative to the American Model*, Kuala Lumpur: Falcon Press, 2001) and the unpublished manuscript, "Malaysia: The Case of Globalization without Development?" (which can be seen at my homepage, www.esd.env.kitakyu-u.ac.jp/yoshihara).

©"A Pilgrimage-Oriented Island: Another Religious Practice in the Makassar Straits" by *Hamamoto Satoko*, December 20, 2001.

What is it like to be pious in a rural remote fishing community in Indonesia? Anyone who visits the island of Barrang Lompo should have had such a question occur to them, due to the unusual number of pilgrims found there. Even during the monetary crisis years since 1997, an increasing number of people from the island have made the pilgrimage to Mecca annually. Several teenaged girls were among them, getting the religious title, *haji*, so their parents could obtain a good bride price from bridegroom candidates. In fact, most pilgrims on the island are women who have been engaging in daily small business transactions for years. According to *Al'Quran*, to make the pilgrimage is an important obligation for Muslims, but if they cannot afford to, it is not necessary. According to the people of the island themselves, the most notable motivation for pilgrimage is not to be a more faithful Muslim, but to improve one's chance for success in social affairs. It is thought that making a pilgrimage and being called *haji* would certify their ability in business matters. Persons who could afford to make the pilgrimage would achieve a certain status and role in social affairs in the community. Thus the pilgrimage is one step in distinguishing themselves from others. I show the various kinds of commercial efforts supporting the pilgrimage and examine daily commercial and social activities on this remote island as an example of the dynamics of everyday life.

© "Rural Development Studies in Bangladesh: An Outcome from 15-years' Participation" by *Kaida Yoshihiro*, January 24, 2002.

Bangladesh rural development studies, started in 1986 in collaboration with Bangladeshi counterparts from different institutions and diverse disciplines, are now at the point of implementing a pilot scheme covering one *Upazila* (sub-district) in order to establish the so-called link model for rural development. The scheme aims to establish a stronger linkage between local governments and villages, something which has been quite absent in rural Bangladesh. The key elements required to set up the link model are: (a) a Village Committee (VC) consisting of *matabbors* (traditional leaders); (b) a Union Development Officer (UDO), a new post whose occupant is responsible for coordinating link-related activities at the Union level (administrative village); and (c) a Union Coordination Committee and Meeting (UCCM) to be chaired by the Union Council chairman and attended by all stakeholders. VCs are encouraged to implement their own village schemes on their own initiative, such as repairing intra- and inter-village roads, paving the village bazaar ground and access road, etc. Streamlining procedures for subsidizing village schemes with the local budget is our concern, too. Through this pilot scheme, as well as through the foregoing two phases of related village studies, we are trying to establish an alternative model for rural development, unique to rural Bangladesh.

© "Symbols of Power in a Philippine Province" by *Patricio Abinales*, February 28, 2002.

This lecture is a preliminary exploration of symbols like local museums and historic churches and the role they play in people's understanding of national politics at the provincial level in the Philippines. Initial explanations are sought in Ilocos Norte, the northern-most province of the Philippines. The Ilocano linguistic area, stretching into La Union province in the southwest and Cagayan and Isabela provinces in the east, is an area notable for producing three of the eight post-war presidents and has formed the so-called "Solid North" voting bloc during elections. It has long been an area of out-migration, most notably to Hawaii and the west coast of the United States, and is perhaps one of the best organized and administered provinces of the country.

© "Global Area Studies Revisited" by *Tachimoto Narifumi Maeda*, March 28, 2002.

When the Center for Southeast Asian Studies

was established, our slogan was "integration" or integrated studies. However, this ideal of integrating multiple disciplines proved very difficult to achieve. Since then, the emphasis changed from integrated area studies to global area studies. Global area studies still takes a holistic approach to the unit area, yet its aim is not a totality or integration, but more a mediated synthesis. It is not a multi-disciplinary approach of various researchers, but a trans-disciplinary approach developed and used by one researcher. Another meaning of "global" is, of course, worldwide. In this sense global area studies tries to understand a unit area in reference to the world. However, since 1995 the concept of global area studies has not been well developed. I would like to urge scholars to pursue global area studies in line with a design science in the coming decades.

© "Technology Transfer in the Electronics and Electrical Sector in Malaysia" by *Lai Yew Wah*, April 25, 2002.

The rapid growth of the Electronics and Electrical (EE) sector in Malaysia is due to the significant role played by the multinational corporations. The dependence on their investments gives rise to several concerns. Has the rapid growth brought about a sense of independence amongst Malaysians? Has the local workforce benefited from the growth? The country's objective is to develop an electronics cluster. Whether this objective can be achieved depends on the scope, strength and maturity of the technological base. Issues such as the capacity to generate indigenous technology and the extent of technology transfer are important.

Three aspects of technology transfer are discussed in this colloquium: the level of the transferred technology, the extent of transfer and technology choice. The level of technology utilized depends on the specification and requirement of the product, equity ownership and size of the firm.

A framework was developed to evaluate the extent of technology transfer. The proportion of local personnel that has mastered the skills necessary to handle the easier phases of technology absorption is higher in the EE sector compared to the supporting industries. The proportion of local personnel who has acquired the skills necessary to handle the various functions of technology absorption decreases as the more difficult phases are reached. Technology absorption is lower in Japanese firms compared to American firms.

Technology which encourages economies of scale is the preferred technology choice. Labor cost is not an important factor in determining technology choice.

外国人研究者人事

■外国人研究員



・Uga U (ミャンマー)。ミャンマー森林省課長。招へい期間2001年11月7日～2002年5月6日。研究題目「ミャンマーのバイオユニットに基づく自然野生動物および生物多様性保護と生態地域の記述」



・Liu Hong (中華人民共和国)。シンガポール国民大学助教授。招へい期間2002年1月10日～7月9日。研究題目「アジアのなりたちを考える——20世紀における中国、東南アジア接触領域の形成について」



・Wu Xiao An (中華人民共和国)。シンガポール国民大学研究員。招へい期間2002年1月16日～7月15日。研究題目「東南アジアの華人質屋業の研究」



・Aroonrut Wichienkeo (タイ)。チェンマイ・ラーチャパット研究所講師。招へい期間2002年2月25日～2003年2月17日。研究題目「貝葉資料に見る東南アジア大陸部における民族集団」



・Lai Yew Wah (マレーシア)。マレーシア科学大学教授。招へい期間2002年3月1日～5月31日。研究題目「マレーシア経済——その問題点と政策」



・Rigoberto D. Tiglao (フィリピン)。フィリピン政府大統領スポークスマン。招へい期間2002年4月16日～10月15日。研究題目「アヨロ政権下のフィリピン政治力学分析」



・Maria Ginting (インドネシア)。LIPI 情報資料センター総合目録部門長。招へい期間2002年4月23日～10月22日。研究題目「京都大学東南アジア研究センター購読雑誌の分析」

■招へい外国人学者

・Sugiah M. Mugniesyah (インドネシア)。ボゴール農業大学女性研究センター所長。2002年2月1日～3月2日。「環境調和型農村開発に関する社会経済的研究」

・Dwi Rachmina (インドネシア)。ボゴール農業大学農学部講師。2月4日～17日。「同」

・Kasian Tejapira (タイ)。タマサート大学政治学部助教授。3月2日～31日。「知的ヘゲモニーの構造 (仕掛け) : テクノクラシー」

・Chalong Soontravanich (タイ)。チュラロンコン大学教養学部講師。3月5日～31日。「同」

・Trisilpa Boonkhachorn (タイ)。チュラロンコン大学教養学部助教授。3月11日～31日。「同」

・Charnvit Kasetsiri (タイ)。タマサート大学教養学部講師。3月15日～31日。「タイ王制の歴史の変容に関する研究」

・Khoo Boo Teik (マレーシア)。マレーシア科学大学社会学部助教授。3月16日～31日。「ヘゲモニーの構造変化 (ネットワーク比較史) に関する研究」

・Dhirawat Na Pombejra (タイ)。チュラロンコン大学教養学部講師。3月14日～31日。「同」

・Olarin Chairavat (タイ)。SCB 研究所所長。3月20日～31日。「国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済」

・Vedi Hadiz (インドネシア)。シンガポール国民大学社会学部助教授。3月16日～30日。「知的ヘゲモニーの構造 (仕掛け) テクノクラシーに関する研究」

・Pornpimon Trichot (タイ)。チュラロンコン大学アジア研究所研究員。3月17日～31日。「同」

・Teresa Encarnacion Tadem (フィリピン)。フィリピン大学社会学部政治学科教授。3月16日～6月1日。「同及びタイ社会の民主化とその動向についての研究」

・Suthiphand Chirathivat (タイ)。チュラロンコン大学経済学部助教授。3月18日～31日。「国家・市場・社会・地域統合のロジックとアジア経済に関する研究」

■外国人共同研究者

・Donald Manaytay Ugsang (フィリピン)。アジア工科大学院アジアリモートセンシング研究センター研究員。2002年4月8日～2003年3月31日。「東南アジアにおける沿海域の変容と資源管理」

＜センター来訪者＞

10月9日Prof. Santhat Sermsri (マヒドン大学人文社会科学部教授) 他6名▽11月21日Dr. Ngo Duc Thinh (ベトナム社会科学研究所所長)、楊光遠氏 (雲南民族学院準教授) 他2名▽2月8日Dr. Zambry Abd. Kadir (心理開発研究所 (マレーシア) 所長) ▽3月8日Prof. Nazaruddin Sjamsuddin (インドネシア総選挙委員会委員長) 他1名▽同日Mr. Boonyong Gate-teth (マハーサラカム大学人文社会学部助教授、Ms. Suparp Boonchai (同副学部長) 他1名▽4月10日Mr. Prakrit Prachonpachanuk (国家安全保障委員会事務局代理) 他4名▽4月19日Dr. Jomo Kwame Sundaram (マラヤ大学経済・行政学部教授) ▽4月26日Dr. Abdul Rashid Abdullar (マレーシアサラワク大学学術担当副学長) 他4名

CROSSING SULAWESI'S LOWLAND VALLEY

By Alex John Ulaen



For more than a week in February 2002, we 11 members of CSEAS traveled up the western part of Sulawesi, from Makassar in the southwest to Manado in the northwest. Sulawesi, which is also known as Celebes, refers not only to the island (Sulawesi island), but

also to the people (*orang* Sulawesi) coming from this island.

On the archipelago's map, this 72,600 square-mile island is easily identified by its unique form, which stretches out like a starfish in the equatorial sea. This well known form also attracts natural researchers to set their feet down and go wandering from the end of one peninsula to another, from beaches to valleys and mountains. Among those who have visited are Alfred Russell Wallace—who left us the Wallacea-line theory—the Sarasin brothers, Davenport, and Adam; seamen, wanderers, missionaries, *khafilah* (Moslem ulamas), and others. These visitors spread news of Sulawesi in their times.

Some Sulawesi place names were recorded in Chinese documents from the fourteenth century and in European documents from the fifteenth century. In early maps, the island was drawn with clear ends but an unknown center or mainland, or even pictured as several separate islands. Tome Pires (1512-13) noted the southern part as *Ilhas de Macassar*, and Simão d'Abrou (1521) recorded *las islas del Celebes*, which included the islands of Sangihe-Talaud, Mindanao, and Makassar. The first map of these islands was drawn by Nicolas Desliens (1541). Other maps followed with the coming of other seamen to the island.

As recorded by early visitors, Sulawesi or Celebes was an island where various ethnic groups resided and formed various cultural domains which developed through time. The southern peninsula was occupied mostly by the Makassarese, while the north was known as the home of the "alfurs" — a common name used by people in the eastern archipelago at that time. Nothing about the center or the mainland and the southeastern part of the island was recorded in these diaries. In fact, in the tradition of *lontara bilang* (palm leaf manuscripts), it was said that the origin of those in the southern peninsula of Sulawesi is actually the central part of the

island. Adriani and some missionaries did finally reach the central and southeastern areas of Sulawesi.

Gradually, the "ethnic domains" found in Sulawesi developed unique color through civilizational change induced by outside influences. "Islamic civilization" as well as religion developed very quickly in a society with *kakaraengan* (kingship) characteristics but Malay features, as part of the tradition of Bugis-Makassar seamen wandering as far as Melaka on the Malay peninsula. Malayan characteristics spread to the northern peninsula and developed among small kingdoms in Gorontalo. In the sixteenth century, a group of people called "alfurs" by Dutch writers became involved with Europeans—Spanish, Portuguese, and Dutch. From generation to generation, this group voluntarily dismissed their ethnic identity and started to imitate the lifestyle of the overseas Dutch. During the nineteenth and early twentieth century big changes continued to occur.

The development of two world civilizations, Moslem in the south and Christian in the north, enriched the existing ethnic domains with different characteristics and depths of understanding. To communities in the south, the presence of Islamic civilization preserved the unity of the culture and social order. The *lontara* as well as the *baju bodo* (a transparent, sleeveless tunic worn by women) continues and has never been seen as something prohibited. Among the Toraja community, both the Moslem and the Christian civilization co-exist tolerantly with the *alukta* (animism) tradition. With the acceptance of Moslem civilization in Gorontalo, women used the sarong veil as the symbol of proper dress for Moslem women—at a time before female headgear using Moslem cloth was adopted nationally. In areas where the gospel spread, either in the north or in the center of Sulawesi, the acceptance of components of Christian civilization—characteristically Dutch—progressed from the classroom to the material culture used—from language to cloth. Although not as strong as in Minahasa, change was also felt in Central Sulawesi.

Makassar developed as a center of education as well as government in the peninsula from the time the archipelago was unified administratively until Sulawesi province was divided into South Sulawesi, North Sulawesi, and Central Sulawesi. Nevertheless, differences in nuance between *ilhas de Macassar* and *las islas del Celebes* were quite strong, not only in government, but also in culture, society, and economy. In government, it appeared in the form of political factions, most outstandingly during the era of Perjuangan Permesta. Differences in social economy and culture are reflected in the trading/

seaman tradition kept alive by the ethnic community in the south and the tradition of bureaucracy-*ambtenaar* characterizing the ethnic community in the north.

The presence of transmigration shelters from Java and Bali, Padang restaurants and Batak churches, *baju bodo*, *kebayas*, and western cloth is not only an indication of ethnic communities' existing tradition. Putting on batik or safari-style fashion on specific occasions, or developing variety in tastes and language, also signifies on a national scale. Most tragic is the use of the articulated Jakarta dialect—which sometimes sounds funny—by youngsters who want to be identified as citizens of the nation's capital city. In fact, in terms of the mother tongue, not only does the use of the Jakarta dialect rob the language of its politeness, but it could also be a kind of denial of ethnic identity.

The New Order government seemed to be successful in managing this island, as manifest in its ability to connect Makassar in the south with Manado in the north through a road network known as the "trans-Sulawesi." This road network facilitated the migration of people from the south and the north to the central area. There they exploited and transformed the coastal and mountainous areas into fishponds and rubber, clove, cacao, and coconut estates. Something interesting to consider is whether people's exploitation of natural resources is related more to their cultural experiences than to rational choice. Does the trans-Sulawesi roadmaker have a similar way of thinking as the builder of the Anyer-Panarukan route in Java?

(Visiting Research Fellow)

COLONIAL LEGAL DILEMMA IN THE MULTI-ETHNIC AND CROSS-STATE ENCOUNTER

By Wu Xiao An



Legal pluralism has been the dominant model for scholars to describe the situation of "multiplicity of legal levels and legal systems" in a given society, each of which may complement, supplement, frustrate, or conflict with one another.¹⁾ But this model places too much emphasis

on the structure and function of the legal system, pure and simple, and neglects other important aspects, such as the historical process of the formation of the legal order, its important relationship with politics and the economy in the colonial context, the changing role of the state in response to the extent of the colonial establishment, and the nature of "indirect rule." All these important aspects

have to be taken seriously into account in our study of the colonial legal order.

Specifically, discussion to date of the laws concerning the Chinese in Southeast Asia has been confined to bilateral interactions between the colonial state and Chinese society, ignoring the significant element of interlocking interstate and interethnic encounters. Purcell even treats it as simply "Anglo-Chinese relations."²⁾ Freedman admirably elaborates on the interaction between colonial law and Chinese society in Singapore by taking Chinese customary law as his point of departure.³⁾ In his brief account of Chinese law, Hooker basically follows the framework laid down by Purcell and Freedman. His main concern is adat law. He presents a compartmentalized personal law, without discussing its interlocking cross-frontier interactions and the process of colonial law formation.⁴⁾ In a recent study, Yong deals specifically with the British legal mechanism in response to Malayan Chinese communism during the interwar years.⁵⁾ All these studies fail to recognize that Chinese business mobility across state boundaries complicated the legal issues because of its cross-cutting of different legal systems and its connection to the wider context of the colonial power struggle.

The colonial context and social structure were the two basic interlocking factors that contributed to the interesting interplay of different legal systems embodied by indigenous customary law, Islamic law, British law, and Chinese law. The transformation of the traditional Southeast Asian legal order subjected it to the shifting balance of power in the oscillating realm of colonial and indigenous politics, where it was used to facilitate the colonial capitalist economy in the sector of labor relations and landholdings, to maintain law and order by the implementation of the penal code and societies ordinance [e.g. in eradicating secret societies], and to protect the interests of the business community in cases of inter-racial dispute, mainly in the European and immigrant sectors. All of these aspects are inextricably tied up with the colonial strategic interest in maintaining political and socio-economic order, which was the major cause of intensive colonial legal intervention. Beyond this, customary law, both indigenous and Chinese, and Islamic law were left alone or were seldom interfered with. There is little doubt that this was because they mainly involved the lower working class and peasants, who were peripheral to the power struggle; but these legal systems were also affected by the changing pace of colonial conquest, the policy of "indirect-rule," indigenous resistance, the need to deploy scarce bureaucratic resources, and fear of uncontrollable social consequences.⁶⁾

The flows of people and their business in the form of migration and economic integration featured interactions between locality and regionality-

interactions between newcomers, sojourners, and settlers. Taking into account elements of colonial context and social structure, such features and complexity appear more outstanding. Different aspects and dimensions of the states were dominated by different groups, who asked different things of the states and often operated discreetly in their complementary spheres. Conflict emerged when groups interacted, states competed, and interests interlocked. This is indeed a fundamental issue rooted in the process of colonial state formation and regionalization, if not yet a process of globalization.

Notes

- 1) For the theoretical discussion, see Leopold Pospisil, *Anthropology of Law: A Comparative Theory*, chapter 4, "Legal Levels and Multiplicity of Legal Systems" (New York: Harper & Row, 1971), 97–126; see also John Griffiths, "What is Legal Pluralism," paper delivered at the Annual Meeting of the Law and Society Association, Amherst, Mass., 12–14 June 1981, later published in *Journal of Legal Pluralism* 24 (1986). On the Netherlands and Netherlands Indies, see Keebet von Benda-Beckmann & Fons Strijbosch, eds., *Anthropology of Law in the Netherlands: Essays of Legal Pluralism* (Dordrecht-Holland: Foris Publications, 1986). On Africa, see Ahmed Beita Yusuf, "Legal Pluralism in the Northern States of Nigeria: Conflicts of Laws in a Multi-Ethnic Environment" (Ph. D. dissertation, State University of New York at Buffalo, 1976). On Southeast Asia with reference to Africa, see M. B. Hooker, *Legal Pluralism: An Introduction to Colonial and Neo-colonial Laws* (Oxford: Clarendon Press, 1975).
- 2) Victor Purcell, *The Chinese in Malaya*, reprinted by Oxford University Press, Kuala Lumpur (1967), 143.
- 3) Maurice Freedman, "Colonial Law and Chinese Society," originally published in *Journal of the Royal Anthropological Institute* 80 (1950), 97–126. Reprinted in Maurice Freedman, 1979, 93–139. For a discussion of the 1950s and 1960s, see his "Chinese Family Law in Singapore: The Rout of Custom," in Freedman, 1979, 140–160.
- 4) M. B. Hooker, *The Personal Laws of Malaysia: An Introduction*, chapter 5, "Chinese Law" (Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1976), 124–146. In another book, he discusses the legacy of Chinese legal thought in Vietnam. See M. B. Hooker, *A Concise Legal History of South-East Asia*, chapter 3, "The Chinese Legal World: The Vietnamese Texts" (Oxford: Clarendon Press, 1978), 73–94. On adat law, see M. B. Hooker, *Adat Laws in Modern Malaya* (Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1972).
- 5) C. F. Yong, "Law and Order: British Management of Malayan Communism During the Interwar Years, 1919–1942," in *Empires, Imperialism and Southeast Asia: Essays in Honour of Nicholas Tarling*, ed. Brook Barrington (Monash: Monash Asia Institute, Monash University, 1997), 126–148.
- 6) See e. g., Mommsen's excellent introduction, in W. J. Mommsen and J. A. De. Moor eds., *European Expansion and Law: The Encounter of European and Indigenous Law in the 19th- and 20th-Century Africa and Asia*, (Oxford: Berg Publishers, Inc. 1992), 1–14.

(Visiting Research Fellow)

RANDOM REFLECTIONS ON "THE BORDERLESS WORLD"

By Liu Hong

I am writing this essay somewhere without an



address, or more precisely, from the sky perhaps above the Sino-Siberian border. Returning from a conference organized by the Asia-Europe Foundation and Sciences Po in Paris concerning the globalization of migration, I am on board a KLM flight heading back to Osaka. The on-

flight entertainment system is showing a Hollywood movie—(what else?)—with the title "K-Pax." Kevin Spacey, one of my favorite actors, plays a delusional man who claims that he is from another planet by the name of K-Pax, where no institutions of family, social, or political control exist. Sitting next to me is a friendly Japanese couple; the husband, a 69 year-old retired dentist who was trained in Princeton in the 1950s, just finished telling me stories about some of the 30-plus countries they had visited. This culturally confusing scene of "space-time compression," together with the conference themes of the past two days, in which about 40 scholars and policy makers from Europe and Asia debated heatedly whether Asia should and could learn from European experiences of forming regulatory control over immigration, prompts me to pin down something, not only to satisfy the assignment for this newsletter, but also to force myself to think about the much debated theme of globalization (and its relevance to Southeast Asian studies).

My first thought is, yes, we are indeed living in a borderless world. Of course, this is hardly a breathtaking revelation; it has been often said and practiced. Over the last few decades, we have witnessed not only the rapid flows of capital, information, and ideas on a global scale, but also the increasing pace of population in motion. A recent survey conducted by the International Labor Organization reveals that the total number of migrants around the world surpassed 120 million in 2000—up from 75 million in 1965—and continues to grow. This leads me to my second point: how has Southeast Asian studies been influenced by such a powerful trend of globalization? On the one hand, with the exclusively defined borders of nations and region, Southeast Asia appears to be a self-contained area with "distinctive" cultures and historical/political trajectories. On the other hand, this region, just like East and South Asia, is increasingly integrating into this borderless world. One important manifestation has been the tremendous outflows and inflows of peoples with diverse cultural backgrounds: the Filipino (domestic) workers in Hong Kong and the Middle East, new Chinese migrants in Singapore, Malaysian laborers in Japan, and so on. This movement of population, among others, helps crystallize the scholarly discourses on globalization and transnationalism.

This juxtaposition of borders within a borderless world presents both opportunities and problematics for Southeast Asian studies as a field. For one thing, there has been a considerable degree of exchange among scholars on various aspects of Asia, through venues ranging from exchange and visiting fellowship programs to scholarly gatherings. This helps make Southeast Asian studies less parochial and more integrative. It also highlights the benefits of cross-regional fertilization in terms of knowledge formation and dissemination. As to challenges, I am thinking of the conventional approaches to the region, defined first and foremost by the supremacy of the nation-state as the predominant unit of analysis, which has been reinforced by a fixed geography: Southeast Asia as a component of the compartmentalized division of various sub-regions of Asia. Ruth McVey's perceptive observation – "too often the interest of Southeast Asian specialists stops at the borders of the nation-state where their research is centered, and they neither consider broader patterns nor make use of the comparative contrasts and differing methodological approaches offered by work on *other parts of the region*"—can be taken further to include *other regions of Asia*. The borderless world paradigm does point to the need to look more closely the shifting and dynamic intersections among different territories, which will in turn leads to a more thorough understanding of Asia's modern trajectories.

As I am surpassing the 500-word limit of this essay assignment, the movie is also drawing to an end. The seemingly convincing delusionist, it turns out, is actually from a small town in New Mexico. The captain's announcement of impending landing, broadcast in Dutch, English, and Japanese (in that order), serves as another reminder of the enduring borders of the borderless world. We are, after all, living among various symbolic and real systems grounded in the nation-state. Seeking a constructive balance in interpreting the nation-states of Southeast Asia within the flexible formation of a borderless world, therefore, becomes a challenge to those of us who, for better or worse, take that "region" as a part of our life in this world.

(Visiting Research Fellow)

MOUNT HIEI: INTEGRATION OF BUDDHISM AND DEEP ECOLOGY

By Uga U

I have been in pursuit of places which are success stories of integrating Buddhism and deep ecology. On 18 November 2001, I had a chance to visit Mt. Hiei along with other participants who were in Kyoto to attend the COE International Seminar, "Changing People – Environment Interactions in



Contemporary Asia: An Area Study Approach." Mt. Hiei, the mountain as a whole, is a temple called "Enryaku-ji." According to my Japanese colleagues, Mt. Hiei, the sacred mountain known as the mother of Japanese Buddhism, has emitted the light of Dharma for

the world for over 1,200 years. Here, the natural environment, religion, culture and human beings are all integrated into an indivisible unity.

Throughout his life from birth to his last breathe, Lord Buddha preferred natural ecosystems and lived very simply as ecosystem human being with no class distinction at all. Great events of Buddha's life took place in a forest or in a nature-oriented park. He was born in the grove of "sal" trees (*Shorea robusta*) at Lumbini park. He saw four Omens in Mingala park which led to the renunciation of his mundane life to become a recluse. He practiced austerity for six years in Uruvela forest and attained Buddhahood under the shade of Bodhi tree (*Ficus religiosa*). He preached his first sermon to the five disciples in the deer park called Migara Wunna. Most of the time Lord Buddha resided in the monasteries built in a forest or in a park such as the bamboo forest of Weluwun, Jetawunna park and Kappasiku park. Finally Lord Buddha, breathed his last in the sal forest called Kusinagara.

Buddhism is a religion espousing peace and contentment, and it is woven into the daily lives of millions of Myanmar. More than just a religion, Buddhism is a way of life, and a cultural phenomenon in Myanmar. The degree to which Buddhism permeates life in Myanmar is readily apparent. Buddhist temples, pagodas and monasteries are found even in the tiniest rural villages. A row of shaven-headed monks in their saffron-colored robes, parading down the roadside in the morning with their alms bowls, is an enduring image of the country. When Buddhism came to Myanmar, respect for and preservation of natural environment became an act of religious merit because of the Buddha's association with natural environment. Since then there was public awareness of the importance of natural environment for human beings. When Buddhism became the dominant faith professed by a great majority in Myanmar, it played an important role in every aspect of Myanmar life. Due to Buddhist teachings, love and respect for natural environment was ingrained in Myanmar culture. The author firmly believes that Buddhism and conservation or deep ecology can be integrated in Myanmar.

Nowadays the balance between people and their environment is being upset and the natural resources in developing countries are depleting at an

alarming rate. People are at the heart of nature conservation as well as the source of many threats. Sustainable development is universally accepted and is at its most creative and sustainable when it arises from people at the grassroots. Nearly half the world's population belongs to one of the world's four largest religions and on both the national and global levels, religious faith is strong at the grassroots and weak among the educated elite. That is, what happens among the majority of the people is a key to what happens around them and this author simply believes that teachings of the four world's religions can play a creative role in the process of sustainable development. Even the belief in nature spirits in many cultures has proved and provided a brake on over-exploitation of natural resources. In conclusion, Mount Hiei of Kyoto will certainly be one of my favorite and most enduring memories as a success story of integration of Buddhism and deep ecology. (Visiting Research Fellow)

REFLECTIONS

By Lai Yew Wah



It was with great excitement that I received word that I was successful in my application to the Center as a Visiting Research Fellow. As usual, there was the bureaucratic procedure I had to go through. Almost immediately I had to apply for leave from my univer-

sity since applications are only considered if they are submitted one month in advance. I had to justify in detail why my stay at the Center would bring tangible benefits to the university: I can contribute immensely to help achieve the university's objective of internationalization, thereby making it an institution of academic excellence. I can help build contacts and networks. This is especially important since the university hopes to establish, among others, a Center of International Studies, of which Southeast Asian studies is an integral part. My university is known for its multidisciplinary approach to problem solving. The Center, being an established and prestigious institution, staffed with experts from very diverse disciplines will be a perfect place for me to learn and to enrich my experience. This will help, in some way, in both my teaching and research. Finally, two days before I was supposed to set foot in Kyoto, my leave was approved.

With great anticipation I boarded the plane for Kyoto. My first impression on arrival at Kansai Airport was the cleanliness of the place and the orderliness of the people. There was no rush and

hurry. Everyone queued up and waited patiently in line. Airport personnel provided fast and efficient service. Clearance at Immigration and Customs was a breeze. Coming from a developing country, this pleasant experience was an eye-opener and was like a breath of fresh air. As I stepped out of the terminal building and approached the vending machine which dispenses bus tickets, I was greeted with a sweet smile from a smartly-dressed female ground staff who bowed with extreme politeness and respect. She later helped me to purchase the ticket after she saw me fumbling with the machine. This unsolicited and spontaneous assistance was received with gratitude. Employees from the bus company, who appeared highly-motivated and cheerful, were there to give a helping hand. The bus from Kansai Airport to Kyoto Station ran with clockwork-precision, save a minor delay due to traffic congestion.

During the bus ride, I reflected on what makes the Japanese economy tick with so much efficiency. How did it achieve its tremendous economic success with relatively so few resources? What breeds success in Japanese business? The major contributing factor, I conclude, must be its people and their work culture. I remembered that someone once said that in Japan, business is a philosophy of life. This philosophy embodies good labor ethics, strong discipline, loyalty, trustworthiness, responsibility, and the willingness to sacrifice. These traits and good values should be emulated by other economies. Now I can understand why Malaysia's Prime Minister launched the "Look East Policy" almost as soon as he took office in 1981. The policy, which continues to this day, aims to learn about work ethics and attitudes, morale, discipline, and management techniques from the Japanese. Under this initiative, hundreds of Malaysian students were sent to Japanese universities and institutes of technology, while Malaysian executives were sent to Japanese companies for business management training and attachment. These Malaysians acquired Japanese management skills and technical know-how and after their return to Malaysia, they have undoubtedly utilized these skills and technology and made significant contributions to the economic development of Malaysia. The immediate example that came to mind of this successful transfer of technology is Malaysia's automotive industry, often cited by the Prime Minister as the major beneficiary of the "Look East Policy." With Japanese assistance, Malaysia is now producing its own national car. My own research has shown that Japanese firms in the electronics and electrical sector in Malaysia have transferred many of their work ethics and practices to Malaysians including, among others, loyalty to the firm, discipline, and establishing a network of suppliers and vendors based on trust.

What are the other factors which contribute to the success of Japanese business? Religious values must have played a part. The co-existence of Shintoism, Confucianism, and Buddhism has built the values placing importance on order, hierarchy, obedience, respect, ethics, etiquette, and morality. Ethics and moral education are already given emphasis in the curriculum of elementary schools. Besides, the education system is also market-driven and produces graduates catering to the needs of society. The homogeneity of society also facilitates understanding of each individual's role in the workplace, thereby strengthening Japanese business.

What does the future hold for Japan? With its prudent economic policies, versatile, resilient, and highly-educated workforce, and emphasis on applied research and technology innovation, especially in the area of miniaturization techniques, there should be no doubt that Japan will recover from its current difficulties and will continue to maintain its status as the second most industrialized economy in the world. My rambling thoughts were finally jolted when the bus came to a halt at Kyoto Station.

(Visiting Research Fellow)

MY SOJOURN IN A HISTORIC CITY

By Leng Ten Moi



It was with great delight and excitement that I accepted the six month fellowship at CSEAS. I rejoiced at the thought of living and working in Kyoto, an enchanting city which is Japan's ancient capital and an important center of culture and religion.

I arrived in late autumn when the scenic beauty of Kyoto was magnificent. The vivid red color of the maple leaves offered a spectacular sight at places like Arashiyama.

Soon winter set in and initially, I was apprehensive of the cold season. Will I be able to survive the cold? I often asked myself. I was told that the winter can be harsh and so bitterly cold that the people of Kyoto believe that "the cold comes out of the ground." Well, winter is over and I must say that it was not as intimidating and dreary as I imagined. I have survived! There were no snowstorms nor gales. Perhaps it was a mild winter.

Kyoto is famed for its springs and autumns but I think winter is not bad after all. I had great pleasure in visiting Mt. Hiei on a quiet, early winter morning when nature seemed to be slumbering under the snow that had fallen overnight. Winter can be a good time for sight-seeing as there are few tourists. You can admire the thousands of Buddhas

all by yourself. You can enjoy yourself in the Botanical Gardens. The gardens themselves might not have much to offer but within the massive conservatory are nine cavernous glass-covered chambers where you can marvel at the interesting and exotic flora ranging from the world's largest flower to savannah and desert plants.

Despite Western influences seeping into the society, Kyoto is still a treasure box of traditional festivals. People preserve their traditions in their daily life and there are festivals to enliven each season. In December, there was a festive air about the city even though the cold winds blew. The shops looked more attractive than usual as people made preparations for the New Year. I enjoyed watching people making *mochi* though I was not tempted to eat. On the 3rd of February—the last day of winter according to the lunar calendar—people including myself thronged the Yoshida Shrine to witness the banishing of winter and the chasing away of demons.

Spring is now in the air with the plum blossoms blooming and the days getting longer. The cherry trees will soon pour forth their lovely blossoms, the ephemeral beauty of spring. There will be cherry blossom viewing and parties. These changes of the seasons impart to me an acute sense of the passage of time and the transience of human existence. Very soon I will be saying *sayonara* to Kyoto.

Though my stay in Kyoto is short, I must say that I have had a fruitful and enjoyable time. I am indebted to CSEAS for enabling me to experience Japanese life and culture. The Center provides a conducive environment and excellent facilities for me to interact and exchange ideas with the staff, foreign research fellows, and graduate students. At the Library, I have gained greatly from the tasks assigned to me, namely, online cataloging of Indonesian and Malay materials and the preparation of a manual on input procedures. From these tasks, I learned a new classification scheme and a new library system. It is my fervent hope that the Center in general and the Library in particular have also benefited from my brief stay at CSEAS. Working in the Library is indeed enjoyable and since most of my time is spent in the Library, I must say that it is the Library that enshrines the happiest memories of my stay in Kyoto. To Ms. Yumi Kitamura and all her staff, I extend my very sincere thanks and I look forward to a long and lasting friendship with them.

(Visiting Research Fellow)

研究会報告

◆Special Seminar

11月6日 Filomeno V. Aguilar (センター外国人研究員) Nationhood, Prehistoric Migrations, and Racial Origins: Comparative Reflections on the Philippines and Thailand▽11月12日 Alexander Horstmann (東京外国語大学) Trapped Minorities and Local Reworkings of Citizenship at the Thailand-Malaysian Border▽1月27日 Amrih Widodo (オーストラリア国立大学) The Killing of Karno Sawunggaling: Violence, Money, and Patronage in Contemporary Indonesian Local Politics▽2月6日 Uga U (センター外国人研究員) Biodiversity Conservation in Myanmar: Issues to Resolved and Immediate Actions to Be Implemented▽3月15日 Wisarn Puppavesa (タイ国立開発行政研究所) Returning Textiles and Clothing to GATT Disciplines▽3月27日 Charnvit Kasetsiri (タマサート大学) Two Resolutions and Their Possible Consequences: Thammasat and Old Bangkok (Ko Ratanakosin)▽4月8日 Alex John Ulaen (センター外国人研究員) Sangihe and Talaud from "Edge of Commerce" to a "Border Area"▽4月9日 Anwar Nasution (インドネシア大学) The Indonesian Economic Recovery from the Crisis in 1997-98

◆「東南アジア大陸部」研究会

第5回: 11月2日 Deanna G. Donovan (センター外国人研究員) Mobilizing the Margin: Impacts of Market Restoration on the Northern Border of Vietnam
第6回: 3月8日 伊藤正子 (大東文化大学) 「タイ族・モン族の『自由移住』——ベトナム東北部と中部高原を結ぶネットワーク」
第7回: 3月27日 高田洋子 (敬愛大学) 「ベトナム領メコンデルタの土地制度史序説——農業発展のなかの土地制度」

◆「東南アジアの社会と文化」研究会

第5回: 11月26日 兼重努 (滋賀大学) 「村落共同体と風水——西南中国トン族の事例から」
第6回: 1月17日 立本成文 (センター) 「宗教に関するフィールドワーク——トロタン・オランフル・マレー」
第7回: 3月22日 杉島敬志 (京大 AA 研究科) 「リオ語の『ドゥア』は『所有者』か? ——『因果的支配』の概念について」

◆「国家・共同体・市場」研究会

12月6日 Chris Manning (オーストラリア国立大学) Populism on the Rise in Indonesia? Reflections on Recent Economic Policy, with Special Reference to Labor
2月22日 Mizuno Kosuke (センター) Social Changes in Rural West Java in Democratizing Indonesia: Administrative and People's Organizations
3月18日 Shigetomi Shin'ichi (アジア経済研究所) Institutionalization of People's Self-organizing Actions for Rural Development: Comparative Analysis of Microfinance Organizations in Rural

Thailand, Philippines and Indonesia

◆「農村開発における地域性」

共同研究会2月26日「地方行政と農村開発: NGO、農協などとの連携を視野に入れて」
浅野宣之 (聖母学院短期大学) 「インド・アーンドラ・プラデーシュ州におけるパンチャーヤトと農村開発」▽岩崎暁 (山口農林事務所) 「農林改良普及員と営農指導員の役割分担 (山口県の事例)——営農情報ニーズと人材育成の視点から」
3月23日「密教基層文化の広がり」
松長恵史 (清風学園高校教諭) 「インドネシアの密教遺跡と遺品——パーラ朝との関連について」▽谷山洋三 (長岡病院ビハラー僧) 「現代バングラデシュのバルア仏教徒の信仰」

◆「国家・共同体・市場研究会」と「日本比較政治学会東南アジアコーカサス関西例会」による研究集会

「東南アジア研究のフロンティア」
3月1日 金子芳樹 (獨協大学) 「マレーシアにおける国家とNGO——NGOセクターにおけるエスニック・ギャップ」▽宮城大蔵 (一橋大学) 「1960年代アジア国際政治力学の変容と日本—マレーシア紛争仲介工作を中心に」▽柿崎一郎 (横浜市立大学) 「『タイ経済と鉄道』とその後」
3月2日 木村宏恒 (名古屋大学) 「民主体制化の開発国家——ASEAN諸国のケースを中心に」▽佐々木拓雄 (九州大学) 「『改革』をめぐるインドネシアの政治変容——イスラーム・庶民・メガワティ」

◆「民族間関係・移動・文化再編」第14回研究会、3月5日
道信良子 (札幌医科大学) 「HIV感染予防対策と女性たちの自己同一性——HIV感染予防の医療人類学的考察」▽池田光穂 (熊本大学) 「コメント」

◆「環ヒマラヤ研究会」3月19日

落合雪野 (鹿児島大学) 「東南アジア大陸部山地の有用植物——生活文化からの視点」▽吉川賢 (岡山大学) 「乾燥地に生育する針葉樹の生態」

◆東南アジアの自然と農業研究会

第103回例会: 12月21日 西村佐栄子 (京大農学研究科) 「マングローブ林地帯における社会林業の初期展開——イラワジデルタを事例として」
第104回例会: 3月1日 山田健一郎 (京大農学研究科) 「ラオス北部における生物資源利用がはたすフードセキュリティ機能について」
第105回例会: 4月26日 川合信司 (秋田県立大学生物資源科学部) 「空白地帯からの開発援助レポート——イリアン・ジャヤ州先住民の視点を探る」

◆「南アジア経済」研究会、4月6日

脇村孝平 (大阪市立大学) 「飢饉・疫病・植民地統治——開発の中の英領インド」▽藤田幸一 (センター) 「インド・西ベンガル州の農業発展と管井戸灌漑——Nodia 県一農村調査より」

バンコクオフィスを大陸部研究の拠点に(2)

河野 泰之

前回のニューズレターで、「バンコクオフィスを大陸部研究の拠点に」と題する連絡事務所便りを書いた。とりあえずこのような方向を投げかけて、京都へ戻ってからみなさんと相談して具体像を練っていかうと考えていた。ところがまもなく、「21世紀 COE を申請する、その中でフィールドステーションを活用した隣地研究の充実が柱になる」という話が飛び込んできた。すでにどこに設置するか、具体的な地名をあげた議論が始まりつつある。「ちょっと待てよ、もう少しみんなでイメージを共有しないと、センターのオフィス（あるいはステーション）と呼ぶにふさわしいものができないのではないか」と思う反面、「とにかく走り出してみないとコトは動かないではないか」とも思う。

最低限、考えておいたほうがよいと思うのは、定着型のオフィスにするのか、それともプロジェクト型のオフィスにするのか、という点である。

定着型のオフィスとは、バンコクやジャカルタの連絡事務所を想定してもらえばよい。特定の研究プロジェクトを推進するためというより、情報交流や資料収集、ロジスティックサポートの拠点であり、複数のプロジェクトが相互乗り入れして利用する。設置期間は10年単位で考える必要がある。現地社会でそのプレゼンスを認められ、さまざまな分野の現地研究者にとって、まさにセンターの窓口となる。そこには誰に投げかけたらよいのか分からない、そもそも投げかけてよいものかどうかの判断がつかないような情報や相談が寄せられる。E-mail が普及しても、心理的な距離が縮まるわけではない。また face-to-face の会話が真の情報を引き出すうえで重要なことには変わりはない。

これに対してプロジェクト型のオフィスとは、特定のプロジェクトを推進する、という特化した目的をもつ。これは通常、現地カウンターパートとともに運営していくことになる。規模や期間はそのプロジェクトに適したものとすればよい。例えば私たちの場合、東北タイでの土地生産力評価プロジェクトを推進するために1996年からコンケン大学農学部の一部屋を借りて、プロジェクトオフィスとして利用してきた。エアコンと数台のコンピュータを設置し、部屋を管理するためにコンケン大学の卒業生を雇用し常駐させている。これまでに10人近い日本人の大学院生がこのオフィスを基地として調査活動に従事してきた。合宿と称して、毎年一、二週間、数人でこの事務所に籠り、共同作業でデータ分析を行う場としても活用してきた。

端的に言うと、プロジェクト型のオフィスでは機動力が有効利用の鍵になるであろう。逆に定着型のオフィスでは継続が力になると思う。センターが組織として運営していくオフィス（あるいはステーション）としては、研究の芽を膨らませる定着型のオフィスが適しているのではないだろうか。（センター助教授）

長津 一史

以前インドネシアを訪れたのは1997年後半、この駐在は4年ぶりの、そしてスハルト政権崩壊後はじめてのジャカルタ訪問でもあった。花屋がならぶ彩り鮮やかな通り沿いに連絡事務所は移り、お手伝いさんの一人は若い女性にかわっていた。こうしたささやかな変化はしかし、街の生々しい変貌ぶりの前ですぐにかすんでしまった。特に驚いたのは、路上の生業の増加、多様化である。

事務所から数kmの距離にあるブロック M は、バスターミナルを中心とする繁華街である。以前から人出の多い場所であったが、にぎやかさが違う。屋台がポツポツとある程度だった路上は、いまや露店で埋め尽くされている。まるで迷路だ。露店には、Tシャツ、時計から、偽造ブランドのバッグ、ポルノビデオ、CDまで、怪しさを存分に誇示した商品が積み上げられている。バス車内の「小商い」も増えた。新聞、ピーナツなど各種のモノ売り、ギター弾き、ジャカルタでの自分の不運をひととおり話し、帰郷のための費用を乞う親子連れ、単なる物乞いなど。長距離バスではない。市内バスである。信号や渋滞で停まった車のまわりにも、同様の「商人」が集まる。誰が買うのか、インドネシア語-英語辞典（もちろんコピー）を売り歩く人もいる。スハルト政権末期には、スハルト一族の腐敗を暴いた海外雑誌の記事がインドネシア語に翻訳されて売られた。いまよく売れているのは、インターネット上に流れる芸能人ゴシップ記事のコピーである。

連絡事務所だより

Uターン地点や、脇道から幹線道への合流点では、青年が交通警察よろしく笛をふきながら車を誘導し、運転手から小銭を徴収する。青年は100ルピア警官（ポリシ・スラトス）とかオガおじさん（パ・オガ）と呼ばれる。オガとはジャカルタ言葉で「したくない」の意。数年前の子供向けテレビ番組に、何を頼んでも「オガ」としか答えない、しかし100ルピア（約1.5円）さえ渡せば何でもいうことを聞く、そういう登場人物がいた。人々はこの「したくない」おじさんになぞらえ、嫌味をこめて、青年たちをパ・オガと呼ぶのだという。

スハルト体制の崩壊は、レフォルマンシ（改革）の時代のはじまりであった。民主的な選挙、地方自治、言論の自由化などなど、各種のレフォルマンシが堰を切ったように進められた。しかし、人々はレフォルマンシだけでは食べていけない。路上の生業を目の当たりにして思うのは、そうした当たり前のことだった。（京大 AA 研究科助手）

2002年5月1日発行
発行 〒606-8501
京都市左京区吉田下阿達町46
京都大学東南アジア研究センター
Tel (075) 753-7344
Fax (075) 753-7356
e-mail: editorial@cseas.kyoto-u.ac.jp
編集 水野 広祐・米沢真理子